

〔和漢三才圖會^{十二}支體^〇髮^〇中

前髮際至後髮際折爲一尺二寸、如髮際不明、則取眉心直上後、至大杼骨折爲一尺八寸、自眉心至前髮際二寸半、自後髮際至大杼骨三寸半

〔松屋筆記^{六十二}〕前髮、袖留半元服、

同書^〇御先^祖記 慶長九癸亥六月十四日、將軍御上浴、殿様雜兵共三壹万餘人也、此時家光公御相伴ニ

テ、頼房ニモ、御前髮御取被成候云々、

〔武德編年集成^{八十一}〕元和元年五月六日、木村長門守ハ、舊臘以來、所勞ユヘ、長髮タリト雖、深ク名

香ヲ其髮ニ留メ、齒ヲソメタリ、是秀頼ノ乳母ノ子也、故山口玄蕃允宗永ガ次男左馬介ハ、色白ク

角前髮也、松平右衛門大夫正綱ガ小舅タリシガ妻女ヲ去々年離別シ、其縁絶タリ、然レドモ首ヲ

賜リ葬ラシメ下欲ス、^〇下

〔松屋筆記^{八十七}〕總髮

五代史^{七十四卷}四夷^附錄^ノ三^ノ八^ノ丁^左 回鶻傳に、婦人總髮爲髻、高五六寸、以紅絹囊之、既嫁則加氈帽云々、文選^六

廿四^本丁^卷左 潘安仁籍田ノ賦に、垂髻^{モト、リノカスカ}、總髻^注に、善作髮云々、此外唐書南蠻傳庾信蕩子賦などにも、總

髮の字面見ゆ、

南史^{廿一}丁^七王融傳に、爰自總髮迄將立年、州閭鄉黨見許、恐脊云々、

〔塵塚談^下〕朝士總髮の事、德廟御代の始の頃には、總髮の人兩三人も有けるよし聽傳ふ、惇廟浚廟

の御代には、絶て一人もなし、當御代より諸國朝士に、總髮の人出來たり、香月翁^〇香山^{香月}云、年老て

は元氣耗て、髮をすれば風に感じて咳嗽を生ず、四十以上は月代をそらすして、ひとつに束ぬた

るによろしといへり、

〔徳川禁令考^{五十}雜業^{雜商}〕寛文十戊年